

NPO法人 SET (岩手県陸前高田市)

東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市広田町地区で、住民と地域活性化に取り組む。震災直後に活動を始め、これまで約800人の住民と協力してきた。2013年にNPO法人化し、全国から大学生を呼び込んで住民と企画を考へたり、修学旅行の誘致をしたりと交流事業を展開。だが、コロナ禍で困難になり、現在は地域密着の活動に力を注いでいる。

運営する「カフェ彩葉」は、互いに支え合う居場所を目指し、古民家を改装して18年に開業。以来、食事のほか、英会話教室や演奏会などのイベントも開催している。学生時代から活動していた移住したオーナーの野尻悠さん(28)は「店名の通り、いろんなスキルを持つ人たちが集まって、彩りをもたらす店になってほしい」と笑顔を見せる。

被災地で交流店や宅配



住民らでアクセサリ製作のワークショップを楽しくメンバー(今年2月、SET提供)

20年から、津波で商店街が流されて気軽に買い物が出来ない高齢者のために、生鮮食品を配達するサービスを週に1回実施。移住者と住民の関係を構築するきっかけにもなっている。

理事長の三井俊介さん(33)は「地域に密着し、町内外の人たちが心地よく支え合えるような活動をしていきたい」と話している。(盛岡支局・三原麻希子)

認定NPO法人たすけあいの会ふれあいネットまつど(千葉県松戸市)

年齢や障害の有無に関係なく、住み慣れた地で自分らしく暮らしてほしい。そんな思いから通院時の送迎など日常の困りごとを手助けする有償ボランティアを募り、高齢者が気軽に集まれるサロンも手がける。

「困った時はお互いさま」。1998年の設立メンバーで、代表を務める佐久間浩子さん(67)は、この言葉を大切にきた。障害のある息子の送迎依頼を受けていた母親が、後に事務作業の仲間に加わってくれたこともある。助け合いの精神が多くの人を巻き込み、有償ボランティアは100人以上に増えた。

絵手紙や手芸、オカリナなどの教室とお茶会をセットにしたサロンは、参加者の憩いの場だ。お茶菓子を片手に談笑する中で、心の距離も自然と縮まる。スタッフの鈴木由紀子さん(79)



歌の教室で参加者に語りかけるボランティアスタッフ(右)(11月15日、千葉県松戸市で)

お互いさま精神で24年

は「心のよろいを取っても大丈夫という安心感にあふれている」と明かす。

県内で同じような活動に取り組み団体は他にもあり、佐久間さんは「まだまだひよっこなのに、ありがたい」と受賞を謙虚に受け止める。助け合いの輪を広げるため、今後は同じ志を持つ団体と協力していくことも考えている。

(千葉支局・平田健人)

NPO法人 UPTREE (東京都小金井市)

東京都小金井市3年以降、介護がや一人暮らしの高地域の店舗を巡るラリーを行ったり、談に打ちあがりける。孤立しがちな地域とのつながりももたらした。

設立者で代表理事津美栄子さん(35)の子育ての最中、らす両親を介護し持つ。入院の手続保険制度に明るくするには相談できるかため、孤立精神的に追い詰めてくる人がほしくて、振り返り、気軽打ち明けられる居場所と思いついた。スタンラリーの飲食店や新聞販売して社会福祉協ね、介護問題や高



読売福祉文化賞 第20回 受賞6団体

新しい時代にふさわしい福祉活動を実践している団体や個人を顕彰する「読売福祉文化賞」の受賞団体が決まった。20回目を迎える今年は、一般部門で障害者も一緒にサイクリングを楽しむ2人乗り自転車普及に取り組み「認定NPO法人タンDEM自転車NONちゃん倶楽部」(松山市)など3団体、高齢者福祉部門で地元食材配達やカフェの運営を通して東日本大震災で衰退した地域の再生に取り組む「NPO法人SET」(岩手県陸前高田市)など3団体が選ばれた。7日に読売新聞東京本社内で表彰式が行われ、受賞団体には活動資金として100万円が贈られる。福祉の向上に取り組む各団体の活動を紹介します。

活気と優しさ 笑顔呼ぶ実践

安藤雄士 栗原小波 袖井孝子 高木憲吉 馬場謙 保高芳昭

一般社団法人 シブヤフォント(東京都渋谷区)

障害者が描いた原画にデザインを学ぶ専門高校生らが手を加え、完成した図柄やフォントを販売。使用料の一部を障害者に還元する取り組みを続けている。就職支援施設での一般的な工賃が月額1万5000円ほどにとどまる中、自立に向けた支援だけでなく、障害者が手がけたアートの収益化も成功させた。

ゆがんだ文字や傾いたピルの絵なども立派なアート作品になる。これまでにユニクロやキヤノンといった大手企業の製品から地元企業のロゴにまで幅広く生かされている。共同代表を務める磯村歩さん(35)は「事業の普及と合わせ、障害者と地域のつながりを深めるこの大切さを伝えていきたい」と話す。

知的障害や精神障害を抱える人はコミュニケーションが苦手な人も少なくない。



シブヤフォントが使われた製品に囲まれる磯村さん(左)とアートディレクターのライ・カセムさん(11月18日、渋谷区で)

障害者アートを収益化

い。それでも、数か月間にわたって作業を共にすることで活気や生まれる。自身の作品が社会に認められた障害者は自信を持ち、学生も障害に対する理解を深めているという。

取り組みを全国に広めるために奮闘する磯村さんは「障害はただの『違い』にすぎない。社会にとって大きな力になってほしい」と話す。(社会部・浜田明)

NPO法人 響愛学園パラ・アーティスト・マネージメント協会(愛知県一宮市)

障害者の音楽など芸術分野の才能を引き出し、活躍の場を広げる支援をするため2018年に設立された。音楽を教えたり、コンサートを開いたりして、一人のアーティストとして活躍できるようにサポートする。

母体となる響愛学園は10年、特別支援学校で音楽講師を務めた児島真里子さん(42)が設立した。ピアノの音色に指先を動かして反応する重度の障害児に接したことなどから、「音楽を通して障害のある子どもたちに夢や希望を持ってもらいたい」と、18歳までを対象に音楽などのレッスンを提供する放課後デイサービスを続けてきた。

現在、所属アーティストはプロ2人を含む20人。名古屋市内で今年3月、9月、所属アーティストによるコンサートを実施。5月には神戸市で「第1回Parra

パラ音楽家を発掘支援



近藤さん(右)の演奏に聴き入る児島さん(11月21日、愛知県一宮市で)

際音楽コンクール」を開いた。バイオリンを弾き同コンクールで銀賞に輝いた近藤楓佳さん(20)は「おかげで活動の幅が広がった」と笑顔を見せる。

児島さんは「所属する人たちは才能にあふれたダイヤモンドの原石」。受賞を励みに、みんなが輝けるよう支援していきたい」と意気込んでいる。

(中部支社・沢村宣樹)

認定NPO法人 タンDEM自転車NONちゃん倶楽部(松山市)

2人で力を合わせたタンDEM自転車での障害者を持つ人々を楽しんでもらうを12年間、開いて専任の津賀真さん・徳行さんNONは楽器で視覚障がい、1夫婦でタンサイクリングしてみながら、200歳で亡くなった。に愛媛県規則が改タンDEM車の公道能になったのに合の夢を実現したいのタンDEM車を買障害者向けの体験を改正初日に開い「人とのつながりたってきた。月自開いていいイベ度開いて好家、競B、行政機関職員な人が手伝って、参らめて自転車に乗れを切って気持ち良